



一般兵アリサ

「鉄の胎」

～使い潰される生体ユニット～

【♡**連合**の**一般兵**の一生の記録♡】

【**オルガエンジン**】シリーズ

生体ユニット・機械姦・快楽落ち・尊厳破壊

本格ディストピア戦闘メカアクション・ハードSF

著：XYZ_L

一般兵アリサ

『鉄の胎』



女の子を生体ユニットにして使い潰しちゃう系

ディストピア・ハードSF・メカ・バトルモノ

『オルガ・コード』シリーズ

著:XYZ_L

第1章:徴募の奈落

世界統合連合・第7管理区画の外縁に広がる廃墟都市。

遙か遠方には、特権階級を守るための巨大な環境防護ドームが白亜の威容を誇っている。

だが、その完璧な人工環境を維持するために吐き出される莫大な排熱と重金属の煤煙が、ドーム外の空を重い鉛色に塗り潰していた。

淀んだ大気は局地的な異常気象を引き起こし、冷たい酸の雨となって、崩れたコンクリートと錆びた鉄くずがどこまでも続く巨大な墓場へと絶え間なく降り注いでいる。

ここは、AIによる徹底した効率化の果てに切り捨てられた旧時代の残骸。

そして同時に、連合が使い捨ての生体部品となる人間を安価に自然繁殖させ、飢えと絶望によって自ら身売りするように仕向けるための、巨大な人間の放牧地でもあった。

アリサは、ドームから垂れ流されるヘドロの臭いが染み付いた路地の隅で、終わりのない飢えに耐えていた。

発育の悪い華奢な体はひどく痩せ細り、汚れきった茶髪はぼさぼさに伸びている。

その灰色の瞳からは、とうに生気の光が失われていた。

傍らでは、かつての美貌を失い頬がこけた母が、骨張った手で5歳の弟を抱きしめている。

弟の小さな体は絶え間ない湿った咳に震え、吐き出す息は不自然な熱を帯びていた。

もはや空腹を訴えて泣き叫ぶ力すら残っていない。

ひび割れた弟の小さな唇を、アリサは自らの乾いた指でそっと撫でた。

何日もまともな食事をとっていない。

このままでは確実に弟は死ぬ。

私が、なんとかしなければ。

座して死を待つだけの日常に、連合の監視ドローンが一枚の布告を投下した。

『適性のある者は、仕事と食料を保証する』

指定された広場には、漆黒の装甲車が牙を剥くように鎮座していた。

徴募官は、その場に不釣り合いなほど柔らかな笑みを浮かべてアリサを迎え入れる。

「よく来てくれたね。君の家族には、すぐにたっぷりの食料を送ろう」

「本当ですか……？　ありがとうございます……っ」

温かいスープと柔らかいパンの幻覚が脳裏をよぎり、アリサは生唾を飲み込んだ。

希望に目を輝かせ、促されるまま冷たい装甲車の内部へと足を踏み入れる。

だが、重厚なハッチが外界の光を完全に遮断する重い音を立てて閉ざされた。

鼻をつくむせ返るような機械油と、古い血の匂い。

エンジンが腹の底を揺らすような低い咆哮を上げた直後、徴募官の顔から柔らかな笑みが雪崩のように崩れ落ちた。

「無知な貧民どもめ。これでお前は、連合の使い捨ての部品だ」

「え……？」

凍りつくような冷ややかな視線。

窓のない暗い車内で、アリサは自分が仕事を得たのではなく、家族の命と引き換えに売られたのだと悟った。

絶望が胸を締め付ける中、装甲車は容赦なく彼女を日常から引き剥がし、奈落へと運んでいく。

到着したのは、地下深くにある巨大な軍事収容所だった。

無機質な白に塗られた空間。

そこには高濃度の消毒液の臭いと共に、何十人もの少女たちが流したであろう血と排泄物の臭いが微かに、しかし確実に染み付いていた。

人間の尊厳が一切排除された、機械と効率だけの空間。

「まず、身体検査を行う。すべて脱ぎなさい」

医療区画の処置室。

暴力的な手つきで、ぼろぼろの衣服が引き裂かれる。

ひんやりとした地下の空気が、アリサの貧相な裸体を撫でた。

拘束台の金属は氷のように冷たく、ひもじさで浮き出たあばら骨と未熟な肌から容赦なく体温を奪っていく。

太い革ベルトが手首と足首に食い込み、脚を大きく、M字に割られた屈辱的な姿勢で完全に固定された。

無防備に恥肉を晒す屈辱と寒さで、華奢な身体に粟が立つ。

「個人識別タグ、埋め込み。動くな」

無機質な音声と共に、医療用のアームが彼女の股間へと無慈悲に降下してくる。

未熟で柔らかな秘部の最も敏感な頂——クリトリスへ、鋭利な金属の針が深々と突き立てられた。

「あぁっ！？　いた、い……っ！　いやぁっ！」

肉を裂き、神経を直接焼かれるような鮮烈な激痛。

傷口からツツツと生温かい血が伝い落ちる。

肉の奥深くにねじ込まれた監視用マイクロチップ。

それは彼女が人間であることをやめ、連合の所有物となったことを告げる痛絶な刻印だった。

「続いて、オルガ適性検査に移行する」

痛みに涙を流す暇すら与えられない。

医師の合図と共に、拘束台の足元から別の機械的なアームがせり出してくる。

先端に備え付けられているのは、冷たい光沢を放つ18cmの主動プローブと、それに続く15cmの副次チューブ。

「ひ……っ……な、なにそれ……や、やめてっ……！」

「適性がなければ、即座に廃棄だ。受け入れろ」

警告もなく、二つの太い金属管が未熟な肉体の穴——膣とアナルへと同時に、暴力的にねじ込まれた。

「ぎ、いいっ……！ あ、がっ……！」

内臓を直接押し退けられるような、圧倒的な異物感と圧迫感。

愛など微塵もない冷たく硬い工業規格品が、アリサの柔らかな内壁を無慈悲に抉り開く。

直後、管の最深部から熱い薬液が勢いよく噴射された。

潤滑剤などではない。

連合が開発した、神経刺激剤と興奮剤の混合カクテルだ。

「あ、あっ……！ な、なにこれ……熱いっ……中が、焼けるうっ……！」

薬液が粘膜に浸透した瞬間、アリサの理性が化学的に溶かされ始める。

強制的に感度を極限まで引き上げられた肉体は自らの意思を完全に裏切り、異常な熱を帯びていく。

内蔵されたバイブレーターが凶悪な高周波振動を開始すると、飢餓で衰弱していたはずのアリサの体が弓なりに大きく跳ね上がった。

「いやぁ……！　だめ、そんなの……おかしく、なっちゃう……っ！　あぁんっ！」

モニターに跳ね上がる心拍データ。

熱を出した弟の姿が脳裏をよぎり、私が助けなければという思いが必死に理性を繋ぎ止めようとする。

だが、無慈悲なチューブの機械的なピストン運動と、チップから流し込まれる電氣的な刺激が、彼女の思考を白く焼き切っていく。

「あぁぁあっ……！　ん、あぁっ……！　ひいっ！♥」

自らの意思に反して、未熟な秘部からとめどなく愛液が溢れ出し、冷たい金属の台をぐっしょりと汚していく。

抗えない快楽に屈した彼女の口から、ついにだらしない涎が滴り落ちた。

屈辱と快樂の矛盾に泣き叫びながら、アリサは生まれて初めての強烈な絶頂へと突き落とされた。

第5章:錯覚の無双

ヴィクターのテストベッドとしての真の役割は、夜の闇だけで終わるものではなかった。

陽が昇れば、アリサは彼が用意した銀灰色の最新鋭機、XN-00-T
ネクスス・プロトのコックピットへと座らされる。

そこは、ハウンドの狭く不潔な鉄の棺桶とはまるで違う、静謐で洗練された無菌の空間だった。

深く沈み込む半仰向けのシートが彼女の体を優雅に保持し、完璧に管理された空調が肌を撫でる。

視界のすべてを覆う全球パノラマモニターには、戦域の熱源や予測軌道が冷徹な幾何学模様のホログラムとして浮かび上がっていた。

鉄と油の臭いはなく、ただ無機質な消毒液の匂いだけが漂っている。

だが、そんな魔法のように美しい空間に座らされているアリサの姿は、およそ兵士と呼べるものではなかった。

彼女が着せられているのは、ヴィクターの悪趣味とデータ収集の効率化を極めた、テストパイロット用の専用スーツ。

バイオポリマー素材は彼女の華奢な体を容赦なく締め付けているが、肝心の胸元と股間部分は最初からぼっかりと円形にくり抜かれている。

むき出しになった柔らかな乳房と、ピンク色の粘膜を晒す秘部には、心拍や子宮の収縮を絶え間なく測定するための冷ややかな吸着式バイオセンサーが、幾つも直接吸い付くように這わされていた。



(こんな格好.....胸もあそこも丸出しで.....恥ずかしい.....っ)

美しいコックピットの中で、自分だけが卑猥な実験動物のように晒されている。その強烈な羞恥に、アリサは顔を真っ赤にして身を震わせた。

さらにシートの中央からは、昨夜彼女を蹂躪したのと同じ、15cmの医療グレードのオルガデバイスと、高密度神経電極を備えた副次チューブが伸びており、彼女の無防備な最深部へと深く、冷たくねじ込まれていた。

『出力安定。いいぞ、アリサ。そのまま敵の群れを蹂躪してこい』

通信機から響くヴィクターの甘い声と同時に、特製の薬液がデバイスから体内に注ぎ込まれる。

「あ、あっ……はい、ヴィクター様っ……！ あぁぁんっ！♥」

粘膜から直接血管へ流し込まれる興奮剤のカクテル。強烈な羞恥心すらも強制的に塗り潰し、彼女の脳波を加速させていく。

戦場に放たれたネクサス・プロトは、かつてのアリサの鈍重な動きとは打って変わり、圧倒的なプラズマ・スラスターの推力で空を舞った。

今回の標的は、セラフィック・オーダーの旧式重装甲機『ケルビム』の部隊だった。

かつてのハウンドでは、味方を犠牲にした数の暴力で押し潰すしかなかった分厚い複合装甲。

面で制圧してくる重火器の凶悪な弾幕。

だが、ネクサス・プロトの圧倒的な推力は、その鈍重な弾幕の隙間を三次元的な推力偏向機動で容易くすり抜ける。

右腕の連射型粒子ライフル。

重装甲の継ぎ目である駆動部を寸分の狂いもなく貫き、次々と敵機を沈黙させていく。

だが、それはアリサ自身の腕前ではなかった。

優秀な戦術AIがすべての弾道予測と最適軌道、射撃タイミングを演算している。

そしてサイコ・ミューを介したオルガエンジンへの大電力要求に合わせ、システムがコンマ数秒前に強制的な限界突破と過剰な絶頂を、彼女の最深部へと叩き込んでいるに過ぎない。

「あああっ！　すご、い……っ！　私、強いっ……！　いくうっ！
♥」

敵機が爆散してモニターが光るたび、絶頂の波に合わせて機体が躍動する。

無防備な胸が激しく揺れ、股間の電極パッドが快楽のデータを吸い上げていく。

通信帯域からは、味方のパイロットたちの驚嘆の声が聞こえてきた。

『あの動きはなんだ……！』

『すごい、これがヴィクター様の新型か！　彼女が、我々の新しいエースだ！』

周囲の称賛と絶え間ない快感。薬液に脳を焼かれたアリサは、自分が選ばれたエースパイロットになったのだという甘い錯覚に完全に酔いしれていた。

だが、どれほど戦場でエースと持て囃されようと、彼女の本来の扱いは何一つ変わっていなかった。

出撃前の格納庫や、帰還後の事後処理。

整備兵や一般のパイロットたちは、口々に「我らがエース」と彼女を称賛しながらも、その目は露出したままの胸や顔へと卑猥に向けられていた。

彼らは当然の権利のように自らの軍服のジッパーを下ろし、機能不全に陥った生体部品へと自らの欲望を擦り付けてくる。

「んちゅっ……れろ、んっ、じゅるるっ……♥」

機体の影で男たちに囲まれ、与えられた肉棒に必死でしゃぶりつくアリサ。

豊かな胸の谷間で白濁液を受け止めながら、彼女は口の端からだらしなく唾液を零す。

かつてなら屈辱に泣き叫んでいたはずのパイズリやフェラチオによる性処理すら、今の彼女は「エースとしての仕事の対価」、あるいは「次なる快楽」として喜んで受け入れてしまっていた。

だが、そんな白濁した脳髓の奥底にも、あの日の絶対的な恐怖だけは消えずにこびりついている。

鈍重なケルビム相手にどれほど無敵の蹂躪劇を演じようと、もしあの白銀の戦乙女が現れたら。

システムが与えてくれるこの脆い全能感など何の意味も持たず、自分は再び惨めに灰にされる。

視神経の奥に焼き付いた純白の機影が疼き、背筋が凍るような絶望に心拍数が跳ね上がるたび。

パイロットの『恐怖』を致命的なエラーとして検知した冷徹なシステムが、それを塗り潰すためにさらなる致死量の快楽を最深部へと叩き込み、彼女を狂乱の絶頂へと突き落としていく。

夜はヴィクターの欲望を満たす娼婦として。

昼はシステムと兵士たちに慰み者にされる生体電池として。

快楽と戦闘の狂気的な二重生活は、アリサの中に残っていた「弟を救う」という本来の目的すらも白く塗り潰し、ただ快感だけを求める空っぽの人形へと、彼女を確実に作り変えていった。

XN-00-T『ネクサス・プロト(テストベッド仕様)』

連合軍データ収集用実験機



概要:

連合のオルガシステム開発責任者アルバート・ノヴァリスの右腕、高位技術者ヴィクターが主導するサブプロジェクト「ネクサス・イニシアチブ」のために用意されたデータ収集用の実験機。

天才(ネオタイプ)専用開発されたXN-00の基本フレームを流用しつつ、「凡人を薬液と強制的な快樂によって限界突破(オーバードーズ)させる」という非人道的な目的のもとに調整された、実験用のモルモット機体である。

作品名:一般兵アリサ「鉄の胎」

発行日:2026年5月3日

発行者:XYZ_L

連絡先:<https://bsky.app/profile/xyz0080.bsky.social>

【注意事項】

本作には強度の尊厳破壊、生体部品化、および救いのない結末などの過激な表現が含まれております。フィクションとしてお楽しみいただける方のみご閲覧ください。

【AI生成技術の利用について】

本作の表紙および挿絵などの画像は、AI画像生成技術を利用して出力したものをベースに、加筆修正やレイアウト調整を行って作成しております。

【禁止事項】

本作のテキスト、画像を含む一部または全部の無断転載、複製、改変、Web上への無断アップロード(SNS、動画サイト、ファイル共有サイト等を含む)を固く禁じます。
